

氏名	Tayebeh NOROUZI
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8903 号
学位授与年月日	平成 31年 3月 25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	イラン人日本語学習者による日本語韻律の生成と知覚

主査	筑波大学 教授	博士（人文科学）	一二三 朋子
副査	筑波大学 教授	Ph.D.（言語学）	竹沢 幸一
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	那須 昭夫
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	松崎 寛

## 論文の要旨

本論文は、イラン人日本語学習者による日本語韻律の生成と知覚に関して、統語構造・韻律構造を統一した文を用いて、学習者のアクセント実現と韻律諸要素による影響を明らかにすることを目的とするものである。具体的には、生成においては、意味的限定・非限定環境を対象として、アクセント弱化（downstep）が生じる環境と生じない環境における学習者のアクセント・イントネーション実現の特徴、特に、意味的限定のある環境で学習者がアクセント弱化を実現できるかを明らかにすることを試みている。知覚においては、同様にアクセント弱化が生じる環境と生じない環境における学習者のイントネーション知覚の実態を明らかにし、またイントネーション知覚に影響する要因を取り上げ、学習者の知覚の過程を明らかにしようとするものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

第1章 序章

第2章 先行研究と本研究の位置づけ

第3章 イラン人日本語学習者によるアクセントの傾向—無意味語の場合—【実験1】

第4章 イラン人日本語学習者の日本語によるアクセント弱化の実現—意味的限定・非限定の場合—  
【実験2】

第5章 イラン人日本語学習者によるイントネーション知覚

第6章 総合考察

第1章では、本論文の背景と目的を述べている。

第2章では、先行研究と本論文の位置づけについて述べている。先行研究は、音声・音韻研究で採用される理論と仮説と本論文で採用するアプローチ、本論文の分析対象、ペルシア語の類型論と韻律、日本語のアクセント観の変遷と韻律研究の概観、学習者の韻律習得研究に分けて論じた上で、イラン人日本語学習者の韻律特徴をめぐる課題と本論文の位置づけについて述べている。

第3章から第5章では、研究の目的を達成するための実験を行い、その結果と考察について述べられる。

第3章では、学習者のアクセント実現について、母語の干渉と韻律環境の影響を検討している。手続きとして、会話フレーム（「A：おさげですか。」「B：おさげじゃなくて、①○○○ですよ。」「A：そうですか。②○○○は、だれの③○○○ですか。」）を用い、無意味語をこの会話フレームの3つの韻律環境（「①焦点」「②中立」「③焦点後」）に入れて発音させる。実験の結果、「LHH」「LHL」「HLL」「LLH」「HHH」「HLH」「LLL」の7つの型が確認され、それぞれの出現頻度が韻律環境によって異なることが明らかにされる。具体的には、全体としてLHL（-2型）及びLHHが多く、LHLは「焦点」の際に多く出現するが、LHHは「焦点後」の環境で多く出現する。これらのことから、学習者のアクセント実現が韻律環境によって異なることが主張される。

第4章では、第3章の結果を踏まえて意味的限定・非限定という構造を用い、アクセント弱化が生じる限定的環境（例えば「千葉の地図をたくさん買った」。以下、「XのYを」構文）及び、アクセント弱化が生じない非限定的環境（例えば「千葉で地図をたくさん買った」。以下、「XでYを」構文）を調査対象として発音させ、学習者によるアクセント・イントネーションの音声的・音韻的特徴について検討している。実験の結果、アクセント弱化が生じない非限定的環境の「XでYを」構文においては、全員に同様のイントネーションパターンが見られる。一方、アクセント弱化が生じる限定的環境の「XのYを」構文においては、学習者によって異なるイントネーションパターンが確認される。以上のことから、学習者は、アクセント弱化が生じない環境のイントネーションパターンは習得していないが、アクセント弱化が生じる環境の統語構造が母語の統語構造と類似しているため、習得していることが示される。さらに、2拍語と3拍語に分けて分析した結果、音節数が多いほど、イントネーション及びアクセントの実現が困難であることが主張される。

第5章では、第4章と同様、アクセント弱化が生じない非限定的環境（「XでYを」構文）及びアクセント弱化が生じる限定的環境（「XのYを」構文）を調査対象に、前部要素と後部要素のアクセントパターン（有核・無核の組み合わせ）及び拍数を統制した音声刺激が作成され、イントネーション知覚実験が実施される。その結果、「有核・無核（例「千葉で／のエビを）」」「有核・有核（例「千葉で／の地図を）」」「無核・無核（例「伊豆で／のエビを）」」は知覚されやすい組み合わせであるのに対し、「無核・有核（例「伊豆で／の海を）」」は、最も知覚されにくい組み合わせであることが示される。また、実験後のインタビューで、どのようにしてイントネーションパターンを区別したかを学習者に尋ね、学習者の知覚ストラテジーを明らかにしている。第4章で述べたように、アクセント弱化が生じる環境の統語構造は、母語の統語構造と類似しているため、アクセント弱化の生じる環境の「XのYを」構文のイントネーションが区別されやすく、各イントネーション句内の語のアクセント型やその組み合わせが知覚に影響することが示されている。また、イントネーション知覚の際に母語の背景や語彙・統語によるバイアスがあると、学習者はイントネーションを無視し、単語列の意味や統語構造から判断してしまうことが主張される。

第6章では、第5章までで明らかにしてきたことをまとめるとともに、韻律習得段階について論じる。最後に、本論文で得られた知見の日本語教育への応用と、今後の課題が述べられる。

## 審査の要旨

### 1 批評

近年の日本語音声教育分野では、様々な観点から学習者の韻律習得に関する研究が行われるようになってきたが、質・量ともに十分な状態であるとは言いがたい。また、調査対象者の母語は、韓国語、中国語、英語などは多いが、その他の言語話者に関する研究や資料は十分とは言えない。本論文は、研究が極めて少ないペルシア語母語話者の音声特徴を調査の対象とする貴重な研究である。

また、主に修飾・被修飾環境に生じるアクセント弱化 (downstep) 現象に焦点を当て、生成と知覚の両面からイラン人日本語学習者の日本語韻律の実態について多角的に分析し、日本語学習者の韻律習得研究に多くの知見を加えている。

生成面については、学習者のアクセントの実現に、個別の語アクセントの習得状況が反映されることを避けるため、敢えて無意味語を用い、プロミネンスとの関係を分析している。従来の研究でも、語アクセントがイントネーションの影響を受けやすいことは指摘されてきたが、本論文では会話フレームと無意味語を用いることで、効率よく韻律環境による違い(「焦点」「中立」「焦点後」)を明らかにすることに成功している。これは、緻密に計算された方法論により導出された結果として特筆に価しよう。また、得られた知見は、ヴェルボ・トナル・メソッド等の従来音声教育方法論で主張されていることとも合致し、従来の実践を理論的に補強するものであると同時に、音声教育に援用することの可能性を示唆するものである。

知覚面については、実験結果の解釈に Cruz-Ferreira (1989) によるイントネーション知覚過程のモデルを援用することで、韻律の知覚における習得順序について、新たな見解を提供している。つまり、提示された文の統語構造やそのイントネーションパターンが既知か否かで学習者の使用基準が異なること、「X の Y を」構文はイラン人学習者にとって母語と類似したパターンで知覚されやすく、「X で Y を」構文は未知パターンであるため知覚されにくいという点である。これは、韻律知覚の研究としても習得研究としても意義深い問題を提起するものである。

ただし、生成と知覚の実験が、それぞれ異なる学習者で行われたため、両者の関係についてより深い考察を行うことができなかった点は、さらなる実験を必要とするところである。しかしそのことは本論文の価値を損なう本質的な問題ではなく、今後の韻律習得研究に新たな知見と新たな方向性を示す研究として、高く評価することができる。

### 2 最終試験

平成 31 年 1 月 18 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。